関東大震災（池田聴風）

憶う　昔　大正　十二年
九月の　帝都　秋天に　満つ
突如の　異変　四辺に　及び
震動は　休ず　塵煙　颺る
猛火　炎々として　市廛を　襲う
日は　落ち　頽屋　陌上に　連なり
死者は　累々として　正に　凄然たり
児は　存し　母を　呼ぶ　今に　至りて　憐れむ

憶昔大正十二年　九月帝都満秋天
突如異変及四辺　震動不休颺塵煙
猛火炎々襲市廛　日落頽屋陌上連
死者累々正凄然　児存母呼今至憐

解説　大正十二年九月一日正午直前、関東全域と静岡県、山梨県を襲った大地震を詠った詩。

語釈　※帝都＝東京。※四辺＝関東八州。※炎々＝火が盛んに燃え上がる様子。
※市廛＝街の中心。※頽屋＝崩れ落ち家々。※陌上＝道路。※累々＝重なり合うさま。
※凄然＝もの凄い様子。

通釈　憶う大正十二年九月、東京は秋の天空に満ちていた。ところが突如の地震が起こり異変は四辺に及び、一向に震動は止まず塵煙が立ち上った。至る所から出火し、延々と燃え広がる。夕刻になると崩れ落ちた家々が道路上に連なり、周りを見ると死者も重なり合い、もの凄い様子である。母と行き違いになった子供は泣きながら母を呼ぶ光景は今思うと不憫でならない。